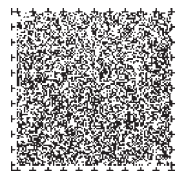


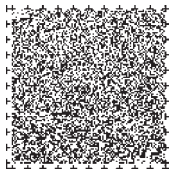


深まりゆく秋～国リハセンター銀杏並木

目次

〔巻頭言〕 副病院長「「目に見えない障害」について思うこと」 …2	〔病院情報〕 病院紹介シリーズ⑳「作業療法部門」 ……11
〔特別寄稿〕 センター創立30周年に寄せて②佐藤徳太郎前総長 ……3	〔研究所情報〕 第36回国際福祉機器展（H.C.R2009）への出展報告 …12 お知らせ～研究所オープンハウスを開催します ……14
〔センター行事〕 第30回リハ並木祭を終えて ……4 第2回職員研修会開催報告 ……6	〔学院情報〕 学校説明会に227名が参加 ……15
〔国際協力情報〕 JICAミャンマー社会福祉行政官 プロジェクト短期専門家派遣報告 ……7	〔野鳥シリーズ70〕 鶴 ……17
〔更生訓練所情報〕 就労支援セミナー開催報告 ……9	〔統計数値〕 平成21年度リハビリテーション 実施状況（10月報告） ……18





〔巻頭言〕

「目に見えない障害」について思うこと

病院副院長 田内 光

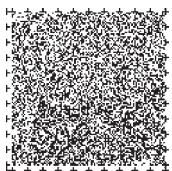
最近、2回ほど聴覚障害者の団体のシンポジウムで話をする機会を得た。その折に感じたことは、本当に聴覚障害者は健常者と見た目には変わらないということである。多くの聴覚障害を持った関係者が会の運営のためにテキパキと動き回り、自らの役割を果たしていた。彼らが聴覚障害を持っていることは、補聴器を付けていることや手話を使っていることでしか判断が付かないなと感じた。肢体不自由や視覚障害などの他の障害では、とてもこのようなスムーズな移動や動作は出来ない。それは見れば分かるゆえ手助けをしてあげようという気に自ずとなるものである。しかし聴覚障害者の動きをみると、手助けなど必要ないと思ってしまう。何を手伝ったらいいか、手伝えることは無いのではないかと思ってしまう。しかしシンポジウムが始まり、手話通訳をしたり、要約筆記が行われたりすると、そうか彼らは聴覚障害者なのだと思える。彼らはコミュニケーションの障害なのだから、その面での手助けが必要なのだと理解出来る。

聴覚の障害は「目に見えない障害」であると言える。それは彼らの障害は見ただけでは判断しがたいからである。日常生活の中では健常者と変わらない行動を取れるからである。このことは聴覚障害者にはある面では非常にありがたいことである。障害者として差別を受けることはないからである。しかしこの事は、聴覚障害者にとって別の面で非常なマイナス面を持っている。それは他の人からは聴覚障害者とは分からず、そのハンディキャップを認知してもらえない事である。したがって聴覚障害者への支援なども、他の障害ほど目立たないので後回しになりがちである。この点で「目に見えない障害」であ

ることは、聴覚障害者には非常に大きなマイナスとなっているのではと感じる。

聴覚障害はその日々の生活を一時、すなわち点として見れば、さほど大きな障害とは感じられない。しかし、その視点を少し変え、線として経過を見ていくと、情報不足による影響は徐々に増大し、非常に大きなものとなってゆく。その障害は時間と共に積み重なり大きくなってゆく障害といえる。このことは先天性ないしは幼児期からの聴覚障害者を見ると理解できる。積み重なる情報不足は、教育面で学力や知識の低下を生み、社会性や情緒面での未熟さを生み、心理的な面や性格など人間性に大きく影響を及ぼす場合もある。このように時間を経るに従い積み重なり影響を増大してゆく障害は他には無いと言える。

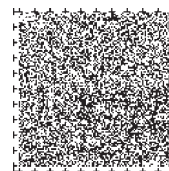
今年度になって全日本難聴者・中途失聴者団体連合会（全難聴）において「総合ヒヤリングセンター構想研究事業委員会」という委員会を開催している。これは、主として残存聴力を活かしている聴覚障害者を対象に、聴覚リハビリテーションの更なる向上を図り、それを支援する総合的な施策を実現する機関の設置を提言するためのものである。現在、全国に37の聴覚障害情報センターが設置され、聴覚障害者への情報提供を主体とした活動を行っている。しかしその内容は地域により様々で、聴覚を活用する聴覚障害者には十分なものとは言えないのが現状である。このような観点から聴覚活用を主体とした聴覚障害者への総合的な支援センターはぜひ必要なものであると思う。この「目に見えない障害」を持つ人たちにも、その障害の重大さを十分に理解して、温かい手を差し伸べてもらいたいものである。



〔特別寄稿〕

国立障害者リハビリテーションセンター 創立30周年に寄せて

佐藤 徳太郎



国立障害者リハビリテーションセンター創立30周年に当たり、過去を振り返りながら、将来への期待を述べてみたい。

統合前の3施設において節目毎に作成された記念誌、「国立身体障害センター創立30周年記念誌」、「国立東京視力センター31年誌」、「国立聴力言語障害センター創立20周年記念資料」などを紐解いてみると、更生援護活動の発展に加えて、研究・教育がどのように形作られたかが解る。また、非常に多くの活動内容が今日の本センターの活動の中に引き継がれていることを知ることもできる。

本センター創立5周年に作成された「草創」には、センター発足前後の様子が詳しく書かれているが、「国立聴力言語障害センター21年のあゆみ」の巻頭言に記されたようなエールをもって送られ・集われた方々が、互いにエネルギーをぶつけ合いながら、次第に一体化していった。それと共に、更生訓練所と病院の整備に続いて、前施設から引き継がれた研究・教育の火種が、研究所、学院として形作られ、各部署の発展が図られてきた。

これまでに、多くの実績を上げている。例えば、更生訓練所においては、6,000名を越える入所生の社会参加に貢献しており、研究所などにおける特許の取得数は13件となり、義肢装具等適合判定医師研修会の受講者は5,000人を越えている。

また、各部署において、特色ある活動がなされてきている。創立から約20年間の更生訓練所の職業訓練によって、外傷性脳損傷、知能指数が60未満の脳原性運動機能障害、あるいは精神障害をもつ人々の実に半数以上が一般企業に就職（一般就労）できていた。病院においては、「ハローベビーコーナー」が立ち上げられ、その集大成として「赤ちゃんとの出会いを語る－脊髄損傷女性の出産と子育て」が刊行されている。研究所においては、補装具の研究とともに、画像解析技術や遺伝子分析、細胞

生物学的技術による障害の診断・治療の研究も進められてきた。学院においては、「盲ろう者ガイドヘルパー指導者研修事業」などの多くの重要な研修事業が継続されている。

さらに、中国やチリ等への国際協力や、高次脳機能障害に対する取り組みなどの大きな事業には、センターの各部署が一体となって、国内外の要請に応じてきた。

これまでに、センターの諸活動を通して、優れた人材を養成し、地域のサービス現場や他機関の要職に送り出していることも本センターの重要な実績である。

一方、センターにおいては、他機関との人事交流が大きなエネルギーの注入になっていることを実証済みである。

このように、本センターは、研究・教育機能を併せ持ち、医療・福祉サービスを実施できる施設であり、先進的なサービスの開発や国際協力に関する要望に応えうる体制を備えている。

さて、米国のNIHにおいて今なお重要なスタッフとして活躍しているインターン時代の同僚を2回訪問したことがあるが、2度目に訪れた時には、改修工事中であった。それは、活動方針の変更による施設の縮小のための大改修であった。将来計画に応じて、大きく縮小することもあり得るNIHのダイナミックな取り組みに感銘を受けた。

本センターでは、創造的な活動が一層重要になるものと考えられるが、慣例にとらわれない人事交流を進めるとともに、厳密な計画の見直しを行いつつ、時には縮小もありうる柔軟性をもって、国内外の要請に大いに応えていくことを期待する。

